

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院での研修を終えて

岡山市立市民病院外科

池谷 七海

このたび国内外科研修プログラムに参加させていただきましたので御報告いたします。2019年9月2日より9月20日までの間、がん研有明病院消化器外科で研修させていただきました。貴重な機会を与えていただいた日本臨床外科学会の跡見裕会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長、日本臨床外科学会岡山県支部支部長の藤原俊義先生に深く御礼申し上げます。また、今回の研修を受け入れていただいたがん研有明病院の佐野武病院長、消化器外科部長の渡邊雅之先生、胃外科部長の布部創也先生をはじめスタッフ・レジデントの先生方、研修に御協力いただいた他職種の皆様にも深く感謝致します。

私は卒後8年目で岡山市立市民病院の外科医員として勤務しています。当院では現在後期研修医が不在なこともあり、多くの手術を執刀する機会に恵まれています。胃癌症例についてはその経験不足を感じていました。このような状況で、2018年の日本消化器外科学会総会で佐野武先生の講演を拝聴した際、鏡視下手術全盛期と思われる中でいかに開腹手術が重要であるかということ認識させられました。当院においては進行胃癌に対する腹腔鏡手術を積極的に行っており、自分としては症例の選択や手技について慎重に検討する必要があるということをもっとも考えつつも、恐る恐る手術を行っている状況でした。こうした中で、当科上司より本プログラムへの応募を提案していただき、大変恐縮ではありますが豊富な手術件数を誇るがん研有明病院胃外科での研修を希望させていただきました。

研修内容としては手術見学と各種カンファレンスへの参加を主に行いました。並列手術も多く、全手術を見られないことが惜しく感じられましたが、3週間で約20件の胃切除術に加え、審査腹腔鏡、緊急手術などを見学できました。スタッフの先生方が行う手術の質の高さは言うまでもなく、レジデントの先生への指導を拝聴できたことも大変ありがたいものでした。自分が指導されているような心持ちで、手術室での時間があっという間に過ぎていました。

審査腹腔鏡は期間中に10件以上施行され、病期診断と治療方針決定を確実に進めていると感じました。また、胃切除症例ではほぼ全例で術中内視鏡を施行することが印象的で、胃切離ラインの慎重な設定や再建後の吻合部観察が行われていました。さらに迅速病理診断も全例で行われ、切除断端の確認に加えて複数箇所リンパ節を迅速診断で評価しており、切除範囲の設定を厳密に行おうとする意識を強く感じました。開腹手術の術野には清潔カメラが用意されており、要所での分かりやすい記録を残すことも意識されていました。手術室看護師や臨床工学技士、麻酔科、病理部などのスタッフは当然のようにこうした作業に協力的で、患者のために必要なことを行うという意識が浸透していると感じました。正確な手術手技に加えて、こうした取り組みが術後合併症の減少だけでなく、予後の適切な評価や改善に貢献しているのだろうと想像されました。

また、開腹胃切除も5例ほど見学でき、特にNAC後の選択的傍大動脈リンパ節郭清や脾摘を伴う症例など、目が離せない症例が続きました。M領域のcStage1症例に対するロボット支援下幽門側胃切除術では、術中迅速診断にてU領域に至る大彎浸潤病変であることおよび4sbリンパ節転移陽性が判明したことで、開腹移行による胃全摘+脾摘術へと術式変更した症例がありました。厳密な治療方針決定にこだわりを感じると同時に、胃癌における術前診断の難しさを実感しました。

そして各種カンファレンスで行われる議論の質の高さには驚くばかりでした。中でも週2回の消化器

外科カンファレンスは簡潔にまとめられたプレゼンテーションの連続で、各臓器毎に全症例の治療方針やその根拠が提示され、すべての内容を把握することはとてもできませんでした。幅広く消化器外科領域の最新知見・臨床研究や問題症例なども話題となり、議論が白熱することも度々ある非常に有意義なカンファレンスであると感じました。

また、御多忙にも関わらずウェットラボでの観音開き法再建を指導していただきました。糸捌きの工夫なども含めて指導していただき、大変勉強になりました。余談ですが、あるスタッフの先生に焼肉店について言及するよう指示がありましたので併せて報告致します。胃外科の先生方お気に入りの店とのことで、全ての料理がとても美味しいのですが、食事の提供量は大変なものでした。昼食抜きであったにも関わらず折り返し地点ですでに満腹になっていました。しかしながら神様と崇められるスタッフの先生方の楽しそうな姿を見ることができ、非常にありがたい機会でした。東京近郊へ赴く機会があれば、改めて手術見学をお願いすると共に、同店舗へも足を運びたいと思います。

本研修を通じて、自己の診療がいかに不十分で現状に甘えたものであるということに気がつきました。今年度のがん研有明病院胃外科レジデントは8人おられ、卒後9年目以上の方々でしたが、私が想像していたものと異なり非常に多くの執刀機会があるという訳ではないようでした。病棟管理やカンファレンス準備、臨床研究などに加え、標本整理や術中内視鏡など手術以外の仕事も多くこなされていました。私はこれまで執刀経験を増やすことを重視していましたが、そのような次元とは違い、胃癌診療に熱意を持つ意識の高い先生方がレジデントとして全国から集まっているのだと感じました。

最も反省した点は、自分は与えられたガイドラインを真似しようと診療を行っているに過ぎないということです。がん研有明病院での診療は、いかにより良い治療を行っていくかということが念頭に置かれ、豊富な症例の中で積極的に最前線の臨床研究が行われているように感じました。自施設ではこういった研究を実施することは困難ですが、標準治療と言われるものも含めて臨床の中で疑問点を抱くことを忘れず、JCOG等の活動に常に目を光らせて診療に取り組むようにしたいです。

最後になりますが、本研修にあたり快く送り出してくださいいただいた当院外科スタッフの先生方にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。